

## トルコにおける女性の活動

寺 阪 昭 信

近年、トルコで仕事をする人が多いので、気の付いたことのなかから述べてみたい。日本人の一般的な感覚からするとトルコはアジア的と思うであろうが、実際はヨーロッパと考えたほうが適切なことが多くある。その一例が女性の仕事ぶりである。現在の日本でも女性の社会的な進出は目覚ましいものがあるが、それでも社会の中核部に活躍している人の割合は少ない。例えば、地理学界においても研究者の割合が極めて少ないことに気付くであろう。ところが、ヨーロッパあたりの学会に出てみると女性の研究者が多数出席しているのに驚かされる。

1987年最初に私が隊長としてトルコに出かけたとき、アンカラ大学言語・歴史・地理学部（日本で言う文学部に当たるか）の我々のカウンターパートである日本語学科主任であるオトカン先生は学部長に挨拶に行くように手配して下さった。かなり緊張して隊員一同が日本語学科のある建物とは別の建物に向向って行った。そこに女性が我々を待っていたのに驚かされた。それが極めて当たり前の雰囲気であったのである。ところでいま数多い日本の大学で全国にいったい何人の女性学部長がいるであろうか。恐らく、東京大学や京都大学で女性の学部長が出現したら大ニュースとなるであろう。

我々の都市調査では資料や地図を求めて県庁や市役所に行くことが多いが、都市計画の部局は特に女性が多い職場であることに気がついた。8割がた女性が占めているという感じであるし、そのトップも無論女性の場合が多い。極端に言えば都市計画部門は女性の花園という感じですらある。これはちょっと日本では想像の出来ない世界である。そして、中年の男性がその下働きをしていることが多い。日本の役所とはある意味では正反対

の雰囲気である。普通トルコでは人を訪ねると最初の挨拶が終わるとまずお茶（紅茶かコーヒーあるいは暑いときにはコーラという選択も可能である）が出され、世間話が終わってからおもむろに本題に入るといふ、ゆっくりしたペースで仕事が始まる。日本風に言えばそのお茶汲みはほとんどの場合年配の男性である。何故、都市計画に女性が多いのかはよく分からないが、比較的新しい職業であることから女性の進出しやすい職場であったのかもしれないと考えている。またその大部分がアンカラにある中東工科大学出身者で占められていることも特色である。この大学はエリート養成大学であり、すべての授業は英語で行われているとのことで、皆よく英語が出来る。その意味からも我々にとって有り難い存在でもある。この大学にも無論、元気の良い女性教授などのスタッフがいる。

市中においても、銀行など女性が多い職場と見なせる。日本の場合は窓口に女性が多く配置され、奥にいる男性の上司が最終的にチェックをするシステムが多いが（いまはコンピュータ化されて少し様子は変ってきた）、トルコの場合は逆のことが多くて、女性の責任者のチェックを受けることが多く、男性が人々の間を書類をもって動き回ってサインをもらっているのをよく見掛ける。現金を扱うカウンターはガラスで囲われ、圧倒的に男性が多い。これは安全性のためであろうか。

イスラム世界では女性の地位が低いように見なされているが、実はかなり高いのではないかということが、このような例からも伺えるであろう。こうしたことは現地に行かないとなかなか分からないことであり、文献から得られるイメージと実際の世界との差でもあり、我々がフィールドに出掛ける際の研究面だけではなく面白い点でもある。